

?龍鏡とその性格

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学考古学専攻講座創設二十五周年記念会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18456

鼉竜鏡とその性格

小林 三郎

はじめに

鼉竜鏡の名称について

鼉竜鏡の成立過程について

鼉竜鏡の性格

倣製鏡出現の意義

鼉竜鏡の年代

はじめに

古墳の副葬鏡として、きわめて特殊な存在を示すものに、「鼉竜鏡」がある。古墳出土鏡は、古墳の数に比例してかなり多量に発見されているが、鼉竜鏡の発見例はすくない。そしてそれを副葬している古墳の年代にさほどの差がない。そして、いわゆる倣製鏡としての内容が全く不明な点が多かった。

四神鏡や内行花文鏡が船載鏡として古墳の副葬品となっていることや、中国三国代に鑄造されたと考えられる三角縁神獸鏡が、やはり古墳の副葬品として発見されるということと、鼉竜鏡などの、いわゆる倣製鏡と総称されるものとは、同じ古墳の副葬鏡としても、自らその性格の上に差異をみとめなければならぬ。

すなわち、既成のものをそのまま副葬品とする方法と、自らの手で創出し、母型の消化試行の中から、必然的に要求された技術と、それを生かすべき組織、あるいは技術者集団の形成という、社会的動向を含むものとの差異であ

る。こうした社会的動向を具体的に把握する方法として、いろいろなアプローチの仕方があろうが、古墳時代における工人集団の実体を追求する一つの手段として、意識的な埋葬儀礼、それがかなり階級的な意味をもつであろう古墳の副葬鏡を抽出し、それを制作した人々の存在を肯定し、更には、広く国産青銅器一般に関する工人集団の存在を確認する方向を目指すものである。この場合、当然、一つの段落として、日本古代社会における「部」の問題にまで到達すべきであろうが、現段階では、まだ資料の分析が不完全であり、個別的分野の詳細な研究成果をまたねばならぬ。

ここでは、鼈鏡のすべての資料を網羅できなかったが、従来、あいまいな存在としてあった鼈鏡について、いくつかの問題提起を試みるつもりである。

鼈鏡の名称について

「鼈鏡」という名称の起源については詳らかではないが、鼈が鰐の一種であるともいわれているから、虺鏡や虺鏡と同様に架空の動物であり、かなりマジカルな意味をもつものと考えられる。「博古図」の中には、いわゆる盤竜鏡を指して鼈鏡としているところからみると、明確なイメージとして鼈鏡が存在していたかどうか疑問である。

鼈鏡についての説明を、いままでの例からみてみると、「盤竜鏡の系統を襲えるもの」(富岡謙蔵『古鏡の研究』)、「鼈の一種であるとか、ワニに似た動物であるとか考証されているが―中略―怪獣文鏡とよびかえてもよからう」(小林行雄『古鏡』)、「四乳を繞る頸の長い蟠竜と、それと頭を一つにした神像を配したもの―後略―」(樋口隆康『鏡』新版考古学講座5)という説明が付されており、共通した見解を得がたいようであった。しかし、いずれにしても明確なイメージがあつて成立したとは思われないし、中国でも本来の鼈鏡をどのように解釈しているのかも明らかでない。

鼈鏡の説明は、それぞれまちまちであるが、共通したことは、いずれも鼈鏡は、いわゆる「倣製鏡」であり、すべてわが国で鑄造されたものであるという説明である。

鼉竜鏡と呼ばれている一群の鏡をみてみると、鼉竜に相当する主文様は、いずれも「巨」を銜んでいる。この現象は、いわゆる神獸鏡系統の鏡群の中の、獸形が示す普遍的な姿であり、同じ鏡群に付せられた銘文の中にある「……上有神守及鼉虎身有文章口銜巨……」に当たるものであり、神仙思想の表現であるとも考えられている。「口銜巨」についてはすでに先学の諸説があり（駒井和愛『中国古鏡の研究』）いまここで触れることもないが、竜虎が銜んだ巨が、神仙思想に関連があるとすれば、鼉竜が銜んだ巨は全く不必要なものであり、全く形式化したものとみなければならぬ。中国鏡の中にみられるいわゆる獸形文鏡・四獸鏡・六獸鏡・獸帶鏡のように、内区主文様がすべて獸形文で満たされる鏡群では、その獸が巨を銜む例がほとんど知られないことから判断されるように、鼉竜鏡が、中国における思想的裏付けの全くない状態で図案化され、鑄造されたものと考えてよいであろう。

しかし、明らかに神像を加えた鼉竜鏡もみられるのである。京都府東車塚古墳出土例（第一図）・山口県柳井町水口代田例（第二図）・奈良県佐味田宝塚古墳例（第三図）などがそれであり、東車塚古墳例は、いわゆる三角縁二神二獸鏡の類であるが、その獸形はもはや、いわゆる鼉竜と呼ぶに何ら抵抗を感じないほどである。水口代田例・佐味田宝塚古墳例は、いずれも倣製鏡であり、四乳を繞った鼉竜が配され、その中間に合計四軀の神像が配されたものである。

鼉竜鏡の中には、このように神獸鏡としての形式を保持するものと、鼉竜が単独に主文様として登場するものとの二種が存在することを理解しうるであろう。従って、ここでは両者を同一に考えることはやめて、神像表現の欠如するもの、つまり、鼉竜が独立して鏡背文様の主要素を占めるものについての呼称としたい。そして、鼉竜鏡という名称も一考する必要がある。

鼉竜鏡という名称が適切であるかどうかということは、小林行雄氏の指摘のごとく、「怪獸文鏡」として統一してもよいが、怪獸を表現している鏡群はほかにもあり、他の怪獸と呼称の上でどのように区別したらよいか、この点で、かえって分類区分を煩雑にしまいそうな気がする。鼉竜が一定のイメージの中で表出されていないとすると、他の怪獸である蟠螭・蟠竜・虺竜・虵竜などのものとは混同する恐れもないが、問題は鼉竜鏡の全てが倣製鏡である点である。

倣製鏡の中には、四獸鏡・獸形文鏡などと呼ばれるものがあり、それらは大体において中国製の四獸鏡・獸帯鏡を模倣しており、その母型が比較的明確である。そしてそれらは「変形四獸鏡」・「変形獸帯鏡」などと呼ぶことによって、明らかに倣製鏡であることを表現しうるが、鼈鏡の場合には、その母型となる中国鏡すら明確でない有様であり、「変形〇〇鏡」という名称も与えられないのである。従って、本来の姿が未確認ながら一心、鼈鏡という曖昧な方法で表現してきた。

しかし、先述のごとく、鼈鏡の中にも二つの姿があつて、一つは神獸鏡としての形式を保持するものと、もう一つは神像を欠いた四獸鏡としての鼈鏡であつた。そこで、未確認ながら、鼈鏡には本来的な意味があり、他の四獸鏡や獸帯鏡類と区別した方がよいかも知れないので、あえて「鼈鏡」という名称を用いようというのである。そして、神獸鏡形式を保つ鼈鏡は、いわゆる鼈鏡から除外して、それには「変形神獸鏡」という名称で呼び、同種の神獸鏡と同列に取り扱うべきであると主張したい。一方、神像を欠いた鼈鏡は、そのまま「鼈鏡」として言い表わし、鏡式名としても、また倣製鏡であるという意味もふくめておきたいと思う。

鼈鏡の成立過程について

鼈鏡を表現しながら、神獸鏡形式を保持する鏡群のあることを前節でのべた。鳥取県馬山(橋津)第四号墳第一主体出土例(第四図)・同第二主体出土例(第五図)(佐々木古代文化研究室記録 第二『馬山古墳群』一九六一年)・山口県宮洲出土例(第六図)(後藤守一『古鏡聚英』上篇 一九四二年)・山口県水口代田出土例(後藤守一、同前)・奈良県佐味田宝塚古墳出土例(梅原末治『佐味田及新山古墳研究』一九二一年)・京都府東車塚古墳出土例(梅原末治『久津川古墳研究』一九二〇年)・岡山県鶴山丸山古墳出土例(第七図)(梅原末治『備前和気郡鶴山丸山古墳』日本古文化研究所報告・第九 一九三八年)などがその代表的例である。この種の神獸鏡形式を保持するものの中にも、大別して二種類存在することがわかる。

その一は、三角縁神獸鏡系統のものであり、いま一つは、平縁画文帯神獸鏡系統のものである。三角縁神獸鏡系統

のものは、鳥取県馬山（橋津）第四号墳、第二主体出土例・京都府東車塚古墳出土例・山口県宮洲出土例がその顯著なものである。とくに、山口県宮洲出土例がその顯著なものである。とくに、山口県宮洲出土例は、舶載三角縁神獸鏡の類であることに注目する必要がある。一方、平縁画文帯神獸鏡系統のものは、比較的数も多いが、さきに挙げたように、鳥取県馬山（橋津）第四号墳・第一主体出土例・山口県水口代田出土例・奈良県佐味田宝塚古墳出土例・岡山県鶴山丸山古墳出土例などが挙げられる。

ここで考えなければならぬのは、さきにあげた山口県宮洲出土例が、舶載三角縁神獸鏡の類であったことである。いま、われわれが鼈鏡と呼んだ怪獸文様は、「博古図」の中の盤竜とは異なり、乳を繞るように弧を描く竜状の文様を指している。われわれが鼈鏡と呼ぶものが、すでに三角縁神獸鏡の中にみられることを指摘しておきたい。一方、平縁画文帯神獸鏡系統の中には、南齊建武五年銘画文帯神獸鏡（梅原末治『漢三國六朝紀年鏡圖説』一九四三年所収）にみられるごとく、乳を繞る鼈鏡様の文様をみとめることができる。建武五年は西曆四九八年であるから、中国鏡としては年代的には若干下降する例と思われるが、わが古墳の年代と比較してみると全くその差がない。

鼈鏡文様のオリジナルなものが、中国製三角縁神獸鏡の中にみられ、その年代も一般に中国三國代、とくに魏にその中心が考定されていて、わが國の古墳への副葬鏡にきわめて密接な関連をもっていることも、すでに説かれているところである。

倣製鏡の多くは、その母型の存在によって理解されてきたし、たしかに中国鏡の模倣から出発していることは事実として否めない。四神鏡・内行花文鏡の倣製に関しては、それなりに意味を持たせた鑄造がおこなわれ、三角縁神獸鏡にいたっては、意識的とも思われる同范鏡の鑄造がおこなわれた。

このような中において、鼈鏡が成立することは、先決の鑄造技術さえ消化してあれば充分可能なことであり、残る問題は何故の文様であり、何故の鑄造であったかということである。

倣製の神獸鏡の多くは、いわゆる三角縁神獸鏡がその多くを占めており、平縁画文帯神獸鏡がそれに続いている。三角縁神獸鏡は、先述のように中国三國代にその中心的年代をおき、その鑄造期間もあまり永くはなかったと考えて

よい。しかし、一方、平縁神獸鏡の類は、中国ではすでに後漢代初期の段階にその萌芽があり、素文縁のものから、いわゆる画文帯神獸鏡へと発展する過程が確認されている。画文帯神獸鏡は、わが国の古墳の副葬品としては、きわめて初期の段階からみられるものであり、副葬鏡としては「伝世鏡」としての性格の強いものが多い。(たとえば、京都府椿井大塚山古墳・岡山市四御神車塚古墳例など)。

その後にも、平縁画文帯神獸鏡が、古墳副葬鏡として、かなり大きい位置を占めていたらしいことは推定に難くないが、三角縁神獸鏡ほど一時期に多量に移入されなかったことは事実であろう。従って、三角縁神獸鏡の移入が停止する段階で、わが国での倣製鏡出現を迎えたであらうし、その時点で模倣すべき中国鏡の多くは四神鏡であり、内行花文鏡であり、三角縁・平縁神獸鏡であったと解しうる。同様にその時点で、鬮龍をふくむ平縁神獸鏡が成立したと考えられる。

実際に、鬮龍をふくむ神獸鏡群の中では平縁画文帯系統のものが三角縁系統のものを凌駕しており、不明確ながら倣製鏡の一つの画期を示すものと理解しなければならない。

鬮龍文様のオリジンが、中国鏡の中の何者であったかは不明確であるが、先述の山口県宮洲例は、四神四獸鏡であった。三角縁四神四獸鏡の一群は、三角縁神獸鏡群中では最古式の鏡群であろうということはすでに説いたことである(小林三郎『前期古墳終末期における様相と関東地方における古墳の成立について』駿台史学 第十三号、一九六三年)。しかし、三角縁神獸鏡の倣製鏡には三神三獸鏡が多くを占めており、四神四獸鏡の倣製鏡はきわめて少なかった。同時に、先述の山口県宮洲例が船載鏡であり、京都府東車塚古墳出土例が同式鏡の倣製であるということは、全く鬮龍文の成立とは無関なものではないということである。

しかしながら、鬮龍文をふくむ神獸鏡の形式はむしろ平縁神獸鏡系統に多いわけであるから、三角縁神獸鏡の例からだけ、その原型を求めるのも不合理ではないだろうか。やはり平縁神獸鏡群の中に、鬮龍文の原型を求めてみなければならぬ。

平縁神獸鏡の中で、画文帯神獸鏡と称する一群のものがある。これは縁に画文帯(飛禽走獸文を表出するもの)が

あり、内区主文様との中間に半円・方形文を交互に鑄出した文様帯があり、銘文の多くはその半円・方形文帯に刻入されているものが多い。特徴によってそれらを二種に大別すると、内区文様の区画に用いられる乳が、通常の円錐形のものと同環状乳のものとの区区分される。前者の代表例としては大阪府黄金塚古墳出土の「景初三年」銘神獸鏡が知られている。環状乳の神獸鏡の中にも紀年銘を有するものがあつて、漢元興元年(西暦一〇五年)、延熹二年(西暦一五九年)、同三年銘の神獸鏡が知られている(梅原末治『漢三国六朝紀年鏡図説』前出)。これらの資料を分析してみると、円錐形乳を持つものは、乳が内区主文様の区画のポイントになっており、環状乳のものは、乳それ自身も内区主文様の一部として獸文の軀の一部になっている例もある。

平縁画文帯神獸鏡系統の鼈龜文をもつ神獸鏡の中には、明らかに環状乳を表現しているものが存在するから、逆に鼈龜文の一部として環状の乳を必要としたのかも知れない。鼈龜文を持つ平縁神獸鏡の中で、鼈龜文が著しく発達して、もはや神像の退化してしまっている例がみられる。たとえば、奈良県佐味田宝塚古墳出土例の如きものは、乳が環状のものではなくなり、円錐形の乳となっている。環状乳と円錐形乳とを同一の内区に使用している例はかなり多くみられるが、環状乳神獸鏡を比較的忠実に倣製しているものに、京都府久津川車塚古墳出土例がある(第八図)。(梅原末治『久津川古墳研究』前出)。この久津川車塚古墳例は、環状の乳がまだ明らかに文様の一部を構成している好例であり、鼈龜文の原型に近いものと考えられる。

このようにして、いわゆる鼈龜文は、三角縁神獸鏡系統の中からも求められるが、主として環状乳画文帯神獸鏡の系統の中から引き出した方が合理的である。少なくとも、鼈龜鏡と呼ばれてきた鏡群は、その九割以上が平縁・平円方形帯の神獸鏡であり、それ以上にまた変化をとげていないことを認めなければならないのである。

いわゆる鼈龜鏡が画文帯神獸鏡の模倣によって成立したとする見解はかなり古くからあるが(たとえば、後藤守一『古鏡聚英』上篇)、現在でも一般の見解として正しいと考えてよいであろう(樋口隆康『鏡』前出)。これらのことをまとめて模式的に表わしてみると



となつて、鼈龜文をもつ倣製神獸鏡はやはり一般的に『変形神獸鏡』の名で呼ぶ方がよいと考えられる。変形神獸鏡の神像が更に欠如する段階で、はじめて『鼈龜鏡』という名称が可能になると考えるのである。

従つて、鼈龜鏡の意味は、変形神獸鏡の変化の最終点であり、あるいは次の段階で『倣製四獸鏡』を生み出す母胎となつたのかも知れない。この問題については、後節で述べることにする。

鼈龜鏡の性格

倣製鏡出現の意義

巨を銜む鼈龜文は、神獸鏡における獸形の変形として捉えることができる。しかし、神像の欠落してしまふ段階で、鼈龜文が巨を銜むことは意味がなくなつてしまふことである。実際に、日本最大の倣製鏡はこの鼈龜鏡であり、第二位の大鏡も鼈龜鏡であることは、必ずしも偶然の結果ではないことを示すものとして興味深いのである。

山口県水口代田出土例が最大であり、出土地未詳ながら三十数種をはかる大鏡も鼈龜鏡であつた。

鼈龜文が変形神獸鏡の中に収められている段階は、倣製三角縁神獸鏡と接触を持っていたと考えられるが、鼈龜文が独立して主文様となる時点は、わが国の青銅鑄造技術の發展段階に一つの画期をもたらしたとみてよいであらう。即ち、鏡の大形化が一つの顕著な現象として具現されるからである。

鼈龜鏡以外で、鏡の大形化がみられるのは大阪府紫金山古墳出土の勾玉文帯神獸鏡であり、奈良県柳本大塚古墳出土の内行花文鏡である。直径三十糎内外の大形鏡は別としても、二十五糎〜三十糎の直径を持つ倣製鏡の出現は、鼈龜文を持つ神獸鏡と接触をもつ時期である。

倣製鏡の出現については、中国鏡の模倣から出発して、倣製鏡を鑄造することに意義を見出した段階を正確に捉え

ることから作業を開始しなければならない。すなわち、伝世鏡をもふくめた中国鏡が、舶載鏡として古墳の副葬鏡となり、舶載されたのち、いくばくかの年数を経過して、その多くが古墳に副葬されてしまい、鏡の絶対数の減少という原因によって、必然的に中国鏡の模倣をはじめたというように一方的に見做してよいであろうか、ということである。

舶載鏡が古墳の副葬鏡として存在する以上、その古墳の被葬者と副葬鏡との関係は、基本的に全く切離させて考えることはできない。そこで鏡を入手する方法や経路についても十分に考慮する必要がある。たとえば、古墳時代社会の中の、有機的なつながりの上に立って配布されたものであるとか、各地の古墳の被葬者達が、それぞれ独自の立場と政治的手腕によって彼地から入手したであろうとか、ということである。

舶載鏡の古墳における分布の実態は、いわゆる同范鏡理論（小林行雄『古墳時代の研究』一九六一年・青木書店）によっても説明されているごとく、「配布」という政治的手段によったものである。

しかし、古墳出現当初の舶載鏡の分布関係は、中国から鏡を移入するというきわめて消極的な方法が根本的には介在しており、自らの手でその配布経路をも開拓したとしても、その中心的な姿はやはり呪術的手段をとらざるを得なかったものと考えられるから、たとえ、中国鏡の模倣であっても、自らの力で、自らの手で鏡を鑄造するということに、呪術的な力以外の何者かを表現せんとしていたことは想像に難くない。舶載鏡を集中的に保有しえた中心的人物が、古墳築造という歴史の変革を具現する中で果たした役割を、古墳の副葬鏡群の分析をもとにして理解しようとする試みは、伝世鏡や同范鏡の位置づけの中で語られている。

古墳時代における初期倣製鏡群の中には、三角縁神獸鏡を中心とする同范鏡群をもち、伝世鏡として用いられた中国鏡を模倣した倣製鏡群をふくんでいることは明らかである。

この倣製鏡の開始は、鏡の絶対数の不足ということや、中国からの移入が何らかの事情で途絶えたということも考慮される。しかし、倣製鏡の出現は、自らの手で創造するということに意義を見出すとすれば、鏡保有の数であるとか、移入手段の欠落ということはさしたる問題にはならないであろう。倣製鏡の当初の姿が三角縁神獸鏡を主体と

するものであることは、自らの手で創出した同范鏡に大きい意味をみとめなければならぬであろう。

伝世鏡の倣製が、三角縁神獸鏡に一步おかれて出現するという事実についてはすでに指摘したことがある（小林三郎「前期古墳終末期における様相と関東地方における古墳の成立について」前出）。この現象は、伝世鏡よりも、より三角縁神獸鏡——とりわけその同范鏡が重要視され、その分有あるいは分配という権力や階級にかかわりのあるひるがりをまず求めようとした結果によるものであろう。そして、伝世鏡類の倣製は、第二段階として伝世鏡本来の意義をとり除き、より複雑な中国鏡の伝統的姿へと逆戻りする傾向によって生じたことと理解しうる。これは単に、伝世鏡の鏡式を倣製するという意識ではなく、伝統的な中国鏡への古墳時代社会の対抗であったかも知れない。何故ならば、大形倣製鏡群の出現は、古墳築造という社会変革がやっと一段落を遂げ、第二期としてまさに発展段階に突入せんとする時期の所産と考えることができるからである。伝世鏡類の倣製という一つの技術的展開は、それが単なる技術上の問題にとどまらず、集中的な工人集団の組織化を必須な条件とし、それをなしうる社会的基盤をも構築しなければなし得なかったという、きわめて重要な鍵を握っているからである。

大形の罫鏡の出現は、まさにそうした社会的な背景をふまえて登場したものであり、奈良県柳本出土と伝える大形内行花文鏡や罫鏡、山口県柳井大塚古墳出土と伝える同種鏡・大阪府紫金山古墳出土の勾玉文帯神獸鏡などは、それらを裏付ける資料であらう。

罫鏡の年代

罫鏡及び罫文をもつ神獸鏡類を副葬鏡として保有する古墳は、奈良県佐味田宝塚古墳（梅原末治『佐味田及新山古墳研究』一九二一年）・京都府東車塚古墳（梅原末治『久津川古墳研究』前出）・山梨県銚子塚古墳（第九図）（銚子塚古墳）文部省史蹟調査報告5、一九三〇年）など比較的古式古墳の中においてみとめられる。三角縁神獸鏡類と併存し、同時に画文帯神獸鏡とも接触をもつこれらの例は、鳥取県馬山古墳第四号墳第一主体出土鏡のごとく、罫鏡文をもつ変形神獸鏡としての第一歩を印しているかの如き感を与える。

画文帯神獸鏡が、いわゆる伝世鏡類と同居するような格好で、古墳の副葬鏡となっている例は、古墳として最古の部に比定されている京都府椿井大塚山古墳(第十図)(樋口隆康「山城国相楽郡高麗村椿井大塚山古墳調査略報」史林第三六卷 第三号 一九五三年)や、岡山市四御神車塚古墳(第十一図)(近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」考古学研究 第一四卷 第四号 一九六八年)などにみられ、それらは、三角縁神獸鏡の年代とほぼ同時期であると考えられている。これらの画文帯神獸鏡が後漢から三国・六朝に至るかなり長期間、中国本土で製作されていたらしいことは、ほぼ誤りのないことと考えられるから、京都府大塚山古墳や岡山県車塚古墳にみられる画文帯神獸鏡は、伝世鏡としてではなくむしろ新式の鏡群として古墳時代にとり入れられ、三角縁神獸鏡と同様に、早速、倣製の対象となりえたのである。このことは、奈良県大塚山古墳発見の倣製方格四神鏡(第十二図)(梅原末治『佐味田及新山古墳研究』前出)が、内区主文様を方格四神鏡式としながら、外区の全体が画文帯神獸鏡に通有な方式を採用しているところからもわかるように、新式鏡群としての画文帯神獸鏡に対する意識の強さを理解することができよう。

そのような意識を前提条件とすれば鼈竜文をもつ神獸鏡の出現は、当然、三角縁神獸鏡の倣製の開始と年代的に接点を持つことは容易に理解できようし、古式古墳からの出土例からも充分裏付けられるであろう。

そして、原型に近い画文帯神獸鏡の倣製はきわめて少なく、鼈竜文をふくむわが国独自の鏡式として登場した。この段階でも、画文帯神獸鏡は中国本土においてもかなり盛行した鏡式であり、わが国において倣製する必要がなくなり、直接、中国からの移入品を用いるということがあったのではないかとも考えられる。四神鏡や内行花文鏡は、古墳時代では、中国ではすでに、ほとんど姿を消した鏡式であり、ことさらその伝世鏡の意味を認めなければならぬ段階で、それらの倣製鏡を造り、伝世鏡の意義の失われた時、それらの倣製鏡も姿を消すことになったと思われる。

鼈竜文をふくむ神獸鏡の倣製のおこなわれた時期は、従って、伝世鏡類を模倣する必要のない段階、そして三角縁神獸鏡の同范鏡がかなり多量に鑄造された直後の、しかも新式鏡の一部として、伝世鏡の持ち得なかつた革新性を表現しようとして鑄造されたと考えられる。

鼈竜文をふくむ鏡群のきわめて少ないという実体は、わが国独自の鏡式として発展させる意味を探索する段階で発

生し、中国本土での伝統的神獸鏡の再度の渡来によってその意義を失った、生命の短かいものであったと考えられよう。そして、次の段階では、きわめて単純な構図をもつ倣製四獸鏡の一部、さらには退化形式としての振文鏡へと変化する途を運命づけられていたのであった。

勿論、四獸鏡自体は、その原形を中国鏡に求めるべきであるが、半肉刻手法の四獸鏡の倣製が技術的に困難であったかどうかは別としても、四獸鏡本来の姿から隔絶した一群の鏡があることを忘れてはならない。四獸鏡との関係については、中国における四獸鏡や、また、他の獸形文鏡との関連において考えてみなければならぬ。製作技法・分布・鏡式分類など、詳細な分析が必要である。このことについては後日、稿を改めて論及したいと念願している。

なお、本論は、昭和四十三年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。